

An outline map of the island of Shikoku, Japan, is positioned in the background. The map shows the four main islands: Ehime, Kochi, Tokushima, and Kagawa. The title '対馬の自然' is overlaid on the map.

対馬の自然

No 13

# 対馬の自然 No.13 の発刊にあたって

歌野啓一

私達は対馬という、本土と異なる環境にある利点をほかし、数々の研究と調査をして対馬の自然のすばらしさを見てきました。

対馬生物部では、親しみやすい蝶に着目し、今年は去年のタイワニモニエロウヨウについて結果をもとに、今年の資料を加えていっそうまとまったものになりました。また、アゲハチョウについても調査しましたが、中でも今年は例年になくジャコウアゲハが多くとれ、これについても今後まとめたいと思います。生物部に新しく魚類班(淡水)を加えまし、植物班も充実した活動を続けています。最後に、部活動やその他に御指導・御協力をしてくださっている諸先生方に厚く御礼申し上げます。

## 目次

		ページ
・ 対馬の自然 No.13 の発刊にあたって	歌野 啓一	1
・ 対馬のラン科植物について No.2	国分 清	2
・ 対馬の古生物と鉱物資源	顧問 小柳孝夫	4
・ 対馬の蝶はどこまで判ったか	顧問 江島正郎	7
・ S.55年度 合宿記録	山口 勉	25
・ 部員の抱負		35
・ 編集後記	歌野 啓一	37

# 対馬のラン科植物について No. 2

田分清

## ◎ はじめに ◎

対馬には、日本ではここで見られないラン科植物があることで知られている。日本には約200種類のラン科植物が自生している。対馬では約50種類のラン科植物が報告されており中でも、ヒメリクンランのように特異な分布をしているものもあります。

## ☆ 対馬におけるラン科植物の分布について ☆

竜良山 : 自生種の数が豊富であるだけでなく、地生ランが着生ランより多い。

白岳 : 自生種の数は少なく、地生ランは着生ランより貧弱である。

御岳 : 地生ランの種類・数とも着生ランのそれと大差はない。

以上のことから対馬では、下島(南部)が上島(北部)よりラン科植物が多いことがわかる。

このことをまとめて図1に示した。

## ☆ ラン科植物の開花期について ☆

対馬での開花期のラン科植物の分布を図2に示した。

図2より着生ランは6~8月に集中して開花する種類は少ないが、長期間花を咲せるものが多い。

地生ランは5~8月に大部分が咲き8~9月か9月中旬~12月には一部が花を咲かせていることがわかります。

これから対馬のラン科植物を研究し、疑問点を一つ一つ解決していくことが大切であります。近年森林伐採、あるいはラン科植物の採集は変じさに懸かれてか山野からラン科植物が激減した事は事実であります。例えば、竜良山のエビネ属の乱獲のため、現在ではなかなか見られぬ状態でのまま乱獲が進むと、絶滅の恐れがあります。これから、私達は対馬の動植物を保護しこの対馬のみばらしい自然を守っていかねばなりません。

図1 対馬産ラン科植物の各地域の分布種類数

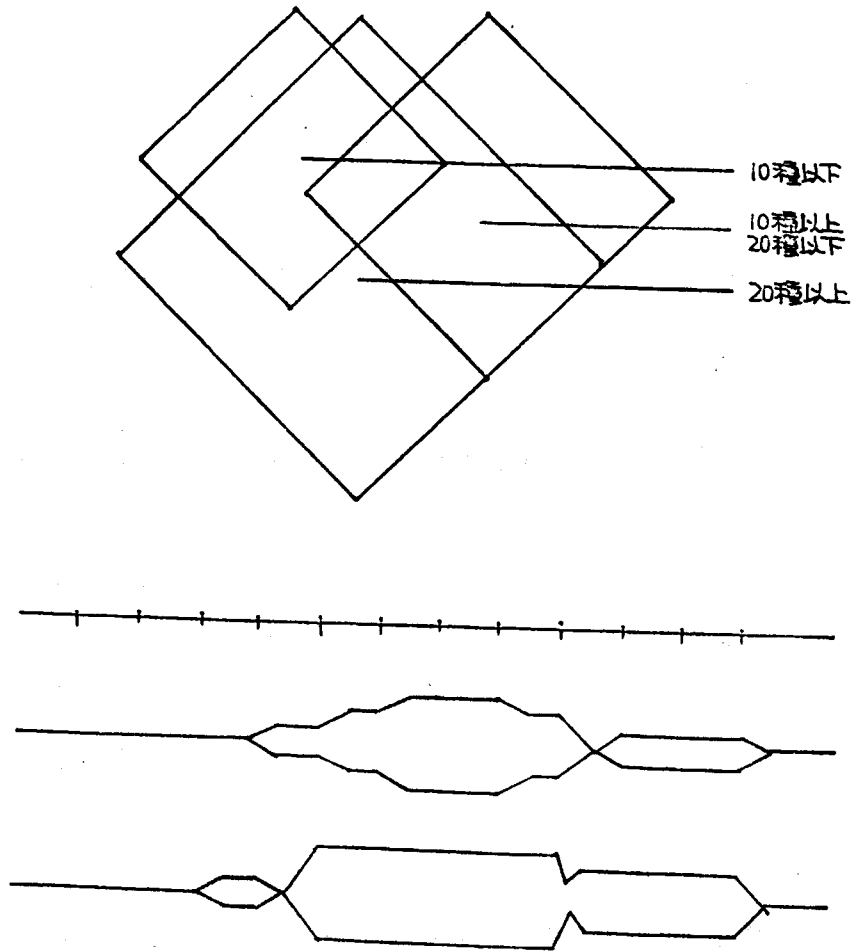


図2 開花期によるラン科植物の分布

- ◇ 1種
- ◇ 2~4種
- ◇ 5種以上

# 対馬の古生物と鉱物資源

顧問 小柳孝夫

10年程前に香岐勝本町湯元の海岸からステゴドン象の化石が発見され、主として牙と臼歯、足の関節部分で、京都大学亀井節夫教授の鑑定によると2歳分ごまろうとのことごめ、た。生存していた時期は約50万年前の新生代第四紀洪積世頃であることが、同時に採集された岩石中のジルコンの年代測定により明らかとなった。約50万年前というと中国大陸に北京猿人がいた頃で、大陸と日本列島が陸続きの時期が、あ、て、多くの猿の仲間が陸伝いに日本に渡、てきていたのではな、りかと推測されるが、事実日本各地からナウマン象の化石が多く発掘されており、香、岐、対馬はその通り道であったと考えられる。香岐が古生物の上からも大陸との関連が大きいとすると、対馬は更に大陸に近く、日本列島生成や日本海の成立に深くかかわ、て、いると考えられる。

対馬の地質構造は朝鮮半島南部(中生代ジュウ系)と似て、いる部分があり、関連づ、ける研究者もいるが、化石の面から新生代第三系であると考、え、ら、れ、て、いる。島全体が主に砂岩・頁岩の互層からなり、対州層群とよ、ば、れ、褶曲構造が著しく、断層も多く見られ、花こう岩・石英斑岩・ヒン岩がこれに属、し、て、あり、ホルンフェルス化している部分も南部に多い。

地史を調べる上で重要な化石としては、上榎植物群、若田植物群、美津島植物群、檜植物群が松尾秀 代(全沢大学)によ、て、報、じ、ら、れ、て、いる。

学名を和名で示すと

上榎植物群……カシ・ウルシ・ハゼ・モクレン

若田植物群……セコイア・スギ・シュロ

美津島町植物群……クロマツ・セコイア・タブ・フウ・モクレン

檜植物群……カシ・クスノキ・クブ・ムクロジ

等、若田植物群地域では動物化石であるニシン目魚類化石が上野輝弥氏(日本ルーテル神学大学)より報、じ、ら、れ、て、あり、古第三紀新新世と推定さ

れている。美津島植物群地域では動物化石としてクモヒトデ・ウニ・ニ枚貝類も発見されている。このほか、前述の上野輝弥氏より、ススキ目魚類化石が豊玉町藪谷で、又ニシン目魚類化石が豊玉町水崎三ツ子島近くで採集されたと報じられている。

筆者も美津島植物群化石及びウニを標本の上で確認しているが、他の植物群化石については早急に採集し確認したいと思う。

右気候的に考察すると、上樅植物群は温帯的で、その上位にある若田植物群、美津島植物群も温帯的、最上位の檜植物群は亜熱帯的であろうと松尾秀氏は説明している。現在程に近いものも多く、現在のような温暖な気候だったと推測される。

### 〔鉱物資源〕

対馬は朝鮮半島と一衣帯水の位置にある為、古くから大陸との往来も多く、鉱物探掘技術が早くから伝えられていたと思われる。

「津島縁笥畧」によると、「674年天武天皇の白鳳3年3月7日、対馬國佐須山掘めて銀を得て二斗を献上した」又「701年又 天皇5年3月1日、対馬から金を献上し、天皇大に喜ばれ元と拜て〔大宝〕と号し、この発見を記念せられた」とある。又1098年大宰権師大工匠房が筑紫に於て記述した「対州便銀記」には、坑道の掘り方、積煤法、出水の記録が記され、当時は大宰府銀として対馬の銀が使われていたようである。

このように日本における地下資源開発の先駆の地でもある対馬は、山深く、平地が少い為、道路開発がみくみ、鉱物資源は豊富である。にもかかわらず、充分利用しなかったらしいがある。1957年長崎県理科教育協会発行の長崎県鉱物誌(岡本要一 郎編)によると、46種類の対馬産鉱物について記載があり、筆者もこれを参考にして注意しながら、地質調査を行い確認を急いでいるが、中には極く微量しか産しない為、ほとんど散らか確認していない。

かつて対馬の対州鉱山で、方鉛鉱・閃亜鉛鉱を中心に多く採行した事もあるが、現存では採掘を中止してゐるとの事で、残念に思つてゐる。又陶土は焼物の原料として現存も採行されてあり、古くから対馬焼の原料となつてゐる。対馬にどのような鉱物資源があるかを知る事は対馬を郷土とする者にとって大切なことであらう。学習の一助にもなればと思ひ、前記長崎県鉱物誌よりまとめてみた。

〔対州鉱山〕……蒼鉛・方鉛鉱・銀・キューバ鉛・閃亜鉛鉱・硫カドミウム鉱・磁硫鉄鉱・黄銅鉱・白鉄鉱・四面鉄鉱・硫砒鉄鉱・黄錫鉱・方解石・菱亜鉛鉱・菱鉄鉱・霏石・異極鉱・バレリー鉱

〔上黒山佐須奈〕……方鉛鉱・閃亜鉛鉱・磁硫鉄鉱・黄銅鉱・白鉄鉱・四面銅鉱・ゲルマニウム鉱・方解石・重晶石

〔上黒山佐護〕……方鉛鉱・閃亜鉛鉱・菱沸石

〔上黒山町志〕……方鉛鉱・閃亜鉛鉱・四面銅鉱

〔成州鉱山〕……方鉛鉱・閃亜鉛鉱・鏡鉄石・白鉄鉱・燐石・磁鉄鉱・菱鉄鉱・硫酸鋅鉱・水鉛鉛鉱・ウラボ石・水辰石・菊石

〔美津島町離加〕……砒硫鉄鉱・明礬石・重晶石

〔美津島町大船越〕……黄銅鉱・菱鉄鉱・白鉄鉱・硫砒鉄鉱・孔雀石・流石

〔琴町〕……方鉛鉱・菱鉄鉱

〔萩原町阿原〕……高陵土・モリモリ石・東沸石

〔萩原町下崎山〕……コバト草・石英・地石・紅柱石

〔萩原町久田〕……楊蔴石・重晶石

〔萩原町上槻〕……青鉛鉱

1. 対馬とは

対馬は朝鮮半島と九州本島の間位置し、ツシマヤマネコを初めとする大陸系の種、ツシマウラボシシジミなど南方の遺存種、さらに寒地性の種に加え、対馬島内で隔離され種分化をとげたと考えられる固有種、固有亜種が生息することが知られている。

本島は面積709.33km<sup>2</sup>、南北約80km、東西約15kmの細長い島で、地質学的には主として第三紀層からなる地塁山地で、標高400mの隆起準平原の山容を呈している。ここから発する河川は壮年期の渓谷をつくり、集落が発達する。植生は海岸部にハマビワ——オニヤブソテツ群落がよく残存し、低海拔の地域にはスタジイ——ホソバカナワラヒ群落もしくはスタジイ——ヤブコウジ群落、内陸部にはイヌブキ——ウラジロガシ群落がある。有明山と上粟町千歳岳山にはススキ——メカルガヤ群落からなる草原が形成されている。海拔350m以上ではアカガシ——ミヤマシキミ群落が見られ、竜良山連山有明山、白湯などに発達する。二次林として上粟町ではコナラ——ノグロミ群落が広く認められ、豆岐崎や島内の各地に局地的にカシワ群落が見られる。

対馬は地理的に朝鮮半島と日本本土との中間に位置するため、古くから多くの研究者が来島しており、蝶類に関してすでに500篇以上の論文が公刊されている。これらの研究物を参考にし、対馬の蝶類相を概観してみたい。

2. 対馬の蝶類の種類数とその構成・分布

対馬で現在までに採集された種類は、迷蝶13種を除き70種(註1)にのぼり、県下で最も豊富なファウナを擁する地域である。しかもシジミチョウ科の種類数が相対的に高く、セセリチョウ科・ジャノメチョウ科が朝鮮もしくは長崎県本島に比べて低いことが特徴の一つである。これはススキ群落をはじめとする草原に乏しく、樹林が長崎県の島嶼よりよく残存していることと深い関連があると考えられる(図2)。

これとは別に島嶼から共通して姿を消す種が多くあり、中でもタケ科を食草とする種が数多く認められるというのも特徴であろう。さらに対馬産の土着種を日本本土産と比べると、対馬産は宍岐・五島産蝶類より明らかに分化度が高い種が占める割合が高い(図3)。

各地域のファウナを野村・ジンプソン指数(NSC)で比較計算し、Mountford法で詳分析した結果は以上の事実をよく反映させている(表5)。平戸・五島・宍岐の蝶類相は、一部に軽微の分化しつつある種や共通して島嶼から姿を消した種によって特徴づけられるものの、本質的に本土とそれと差がないことを意味している。従ってこれら島嶼は日本本土のファウナを単に貧弱にしたに過ぎない。島を縦・フロラの単純化に伴って、蝶類相も一様ではないにしろ同様な現象を起こしたと考えられる。

対馬については平戸・五島・宍岐などと共に単純化

科名	Korea	Tsushima	Iki	Hiroshima	Settsu	Nagasaki
タケ科	36	5・2	4	6	7	13・2
アゲハ科	18	10	7	8	8・1	12・1
シジミチョウ科	19	8・3	5・1	6	6・2	8・3
シメミチョウ科	69	20・1	10	9	12・1	21・1
ウスギンシジミ科	11	1	1	1	1	1
テンゴチチョウ科	1	1	0	0	0	1
マダラナチョウ科	1	1・1	1・1	1・2	1・3	1・5
カタヘバチョウ科	76・4	15・5	11・4	13・3	13・3	21・6
ジャノメチョウ科	28・1	6・1	4・1	8	7・1	9・1
合計	264・5	70・13	43・7	72・5	57・13	90・19

註1. 日浦(1975)の  
コキマダラセセリ、  
菅谷(1970)のウスコモ  
シアリギマダラ(1980、  
7・28 奥津島町太郎  
越(1981)は  
正式発表まで保留  
した。

図1. 長崎県島嶼の蝶類種類数



現象が認められるが、本土と本質的な差異は認められない。しかし固有種（亜種）や生物相の単純化、近接する地域からの種の進出、残存という現象が色濃く認められ、他の地域と違って独自性を保っていることは事実である。中でも大陸系（台湾モンシロチョウ）、熱帯残存種（ツシマウラボシシジミ）、北方系の混入 Theclini の大部分、キバネセセリ、ホシチャバネセセリ、ミスジチョウなど、固有亜種（ジャコウアゲハ、ウラナミジャノメ）は特徴的であろう。

蝶類の分布はその種の食草、すなわち環境要因と人為的影響の総和としての植生に大きく依存する。従って対馬の蝶類の分布を、草原性から樹林性までに大別し、これとは別に全島にわたって普遍的に分布する種群（広分布種）や、やや広く分布する種群（中分布種）、非常に限られた地域にのみ知られている種群（狭分布種）の3つに類別できる。

	Tsushima	Iki	Goto	Nagasaki
○コチャバネセセリ	-	-	-	+
○オオチャバネセセリ	-	-	-	+
○イチモンジチョウ	-	-	-	+
○ヒオドシチョウ	-	-	-	+
○イシガケチョウ	-	-	-	+
○コムラサキ	-	-	-	+
○クロヒカゲ	-	-	-	-
○サトキマダラヒカゲ	-	-	-	+
○ヤマキマダラヒカゲ	-	-	-	+
○コジャノメ	-	-	+	-

○：食草：タケ科

図3. 各島嶼における10種の所産の有無

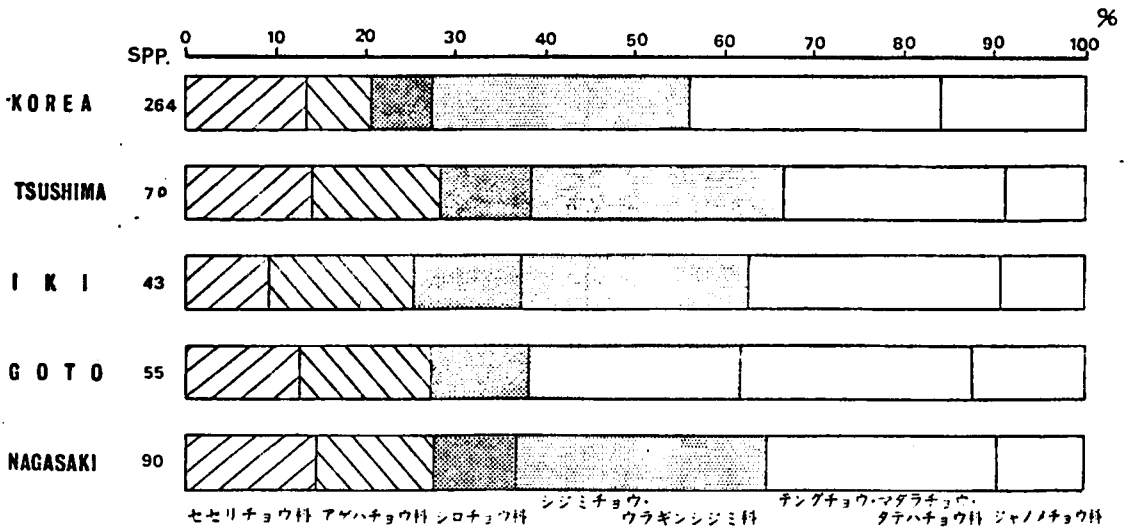


図2. 長崎県島嶼の科別構成、地区の横の数は土着種 種数

NSC	NSC					
	Hirado	Iki	Goto	Nagasaki	Tsushima	Korea
Hirado						
Iki	90.9					
Goto	88.5	97.7				
Nagasaki	100.0	100.0	100.0			
Tsushima	88.5	97.7	98.3	88.6		
Korea	88.5	95.5	88.9	81.7	80.0	
app.	52	43	55	82	70	264

図4 長崎県島嶼の野村・シン普森指数(NSC)  
 $NSC = c/b \times 100, a > b, 0 \leq NSC \leq 100$   
 a: 比較する2地域の各々の種数  
 b: 比較する2地域の共通種数

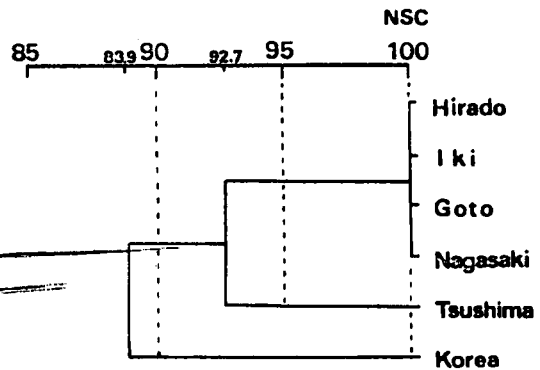


図5 野村・シン普森指数による群分析 (Mountford法による)

### 3. 対馬における蝶類の生態分布

動物、特に蝶類のように1次的に植物に依存する種の分布は、自然環境と人為的影響の総和としてのその土地の植生に大きく左右される。そこで植生を基に、対馬の蝶類の分布を、全島にわたって普遍的に分布する種群（広分布種）や、やや広く分布する種群（中分布種）、非常に限られた地域にしか知られていない種群（狭分布種）の3つに大別してみた。

このうち問題が多い狭分布種を中心に、分布の実態を図7に表わした

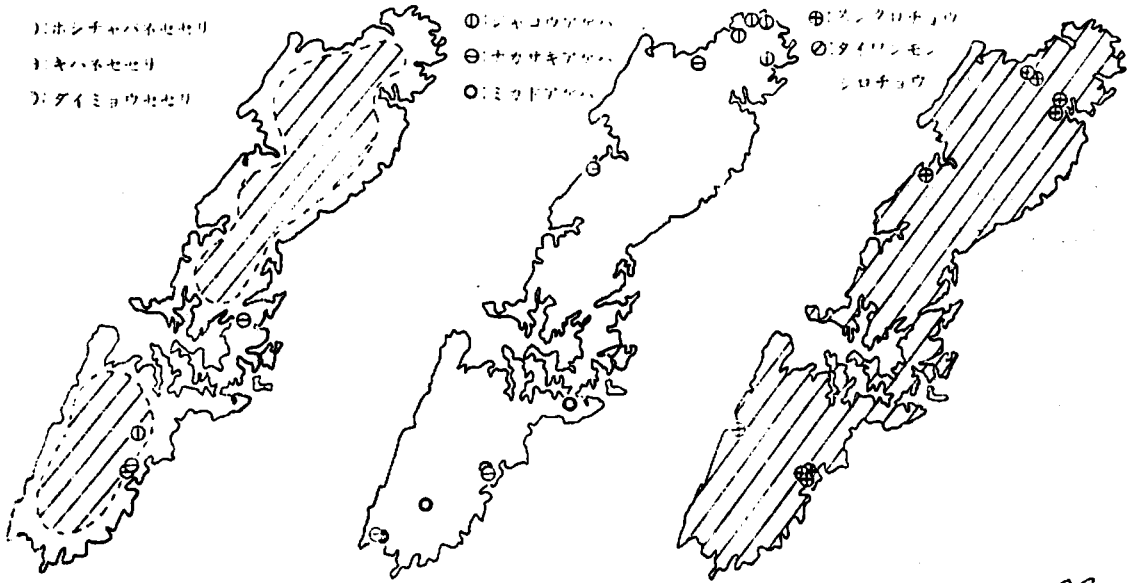
	草 地		樹 林	
	草 原 性	好 草 原 性	好 樹 林 性	樹 林 性
狭 分 布	シルビアシジミ クロツバメシジミ ジャノメチョウ ヒメウラナミジャノメ	ホシチャバネセセリ オオササギアゲハ スズグロチョウ  オオウラギン スズヒョウモン ウラギンヒョウモン クロシジミ クロコノマ	アイミョウセセリ ジャコウアゲハ ツシマウラボシシジミ	キバネセセリ アオバセセリ ミカドアゲハ アカシジミ ミズイロオオガシジミ キリシマミドリシジミ オオミドリシジミ ウラジロミドリシジミ ターバンルリシジミ サツマシジミ ミスジチョウ
分布はやや制限	ツマアカシジミ ウラギン スズヒョウモン ヒメアカタテハ	ホソバセセリ キマダラセセリ タイソウモンシロチョウ ツマキチョウ ゴイシシジミ ミドリヒョウモン クモガタヒョウモン メスグロヒョウモン ウラナミジャノメ キアゲハ	ミヤマカラスアゲハ カラスアゲハ トラフシジミ ゴマダラチョウ クロヒカケ ヒメジャノメ	ミヤマセセリ ムラサキツバメ テングチョウ ゴマダラチョウ
広 分 布	イチモンジセセリ チャバネセセリ  モンシロチョウ モンキチョウ ベニシジミ ウラナミシジミ ヤマトシジミ ツマグロヒョウモン アカタテハ  キクテハ	キチョウ ツバメシジミ ウラギンシジミ ルリクテハ	モンキアゲハ アゲハ クロアゲハ ルリシジミ アサギマダラ コミスジ	アオスジアゲハ ムラサキシジミ

図6. 対馬産蝶類の生態分布

1) ホシチヤハネセセリ  
 2) キハネセセリ  
 3) ダイミヨウセセリ

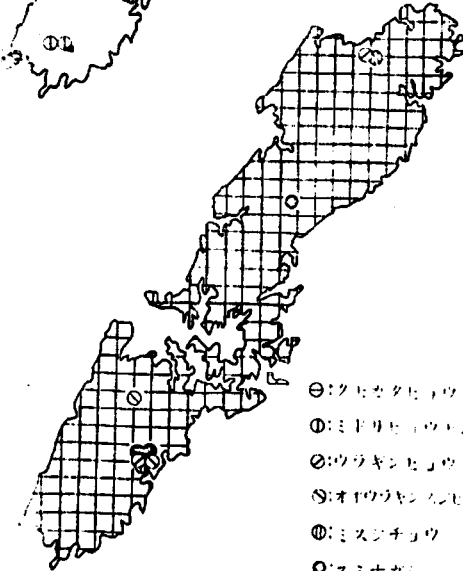
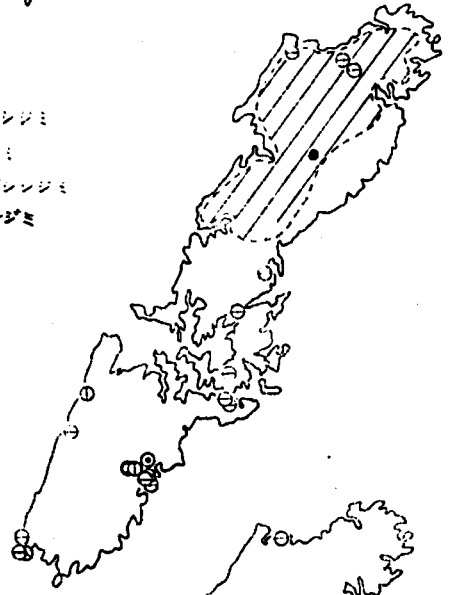
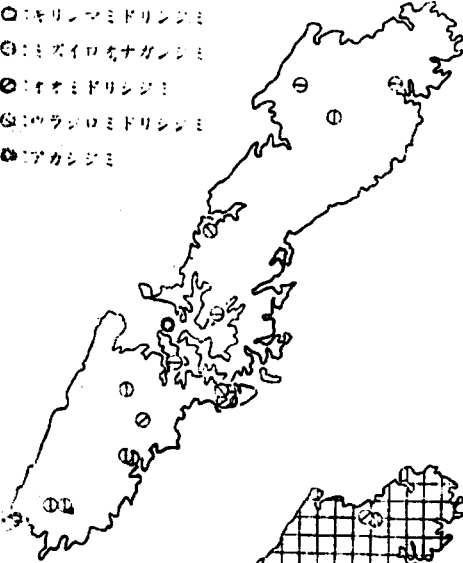
① シヤコウアサ  
 ② ナカサキアサ  
 ③ ミナトアサ

④ シンクロシヨウ  
 ⑤ タイリンモン  
 ⑥ シロシヨウ



⑦ キリンマドリシジミ  
 ⑧ ミズイロオナガシジミ  
 ⑨ オオミドリシジミ  
 ⑩ ウラジロミドリシジミ  
 ⑪ アカシジミ

⑫ クロシジミ  
 ⑬ サツマシジミ  
 ⑭ アハハルシジミ  
 ⑮ シルビシジミ  
 ⑯ シシマクラボシジミ  
 ⑰ クロツバメシジミ



⑱ クトカタシロウシ  
 ⑲ ミドリシロウシ  
 ⑳ ウラギンシロウシ  
 ㉑ オオウラギンシロウシ  
 ㉒ ミスジコウ  
 ㉓ スミナガシ

㉔ ジョウノチヨウ  
 ㉕ クロジョウ  
 ㉖ ヒメウラガミジョウ

図7. 対馬産28種の生息地

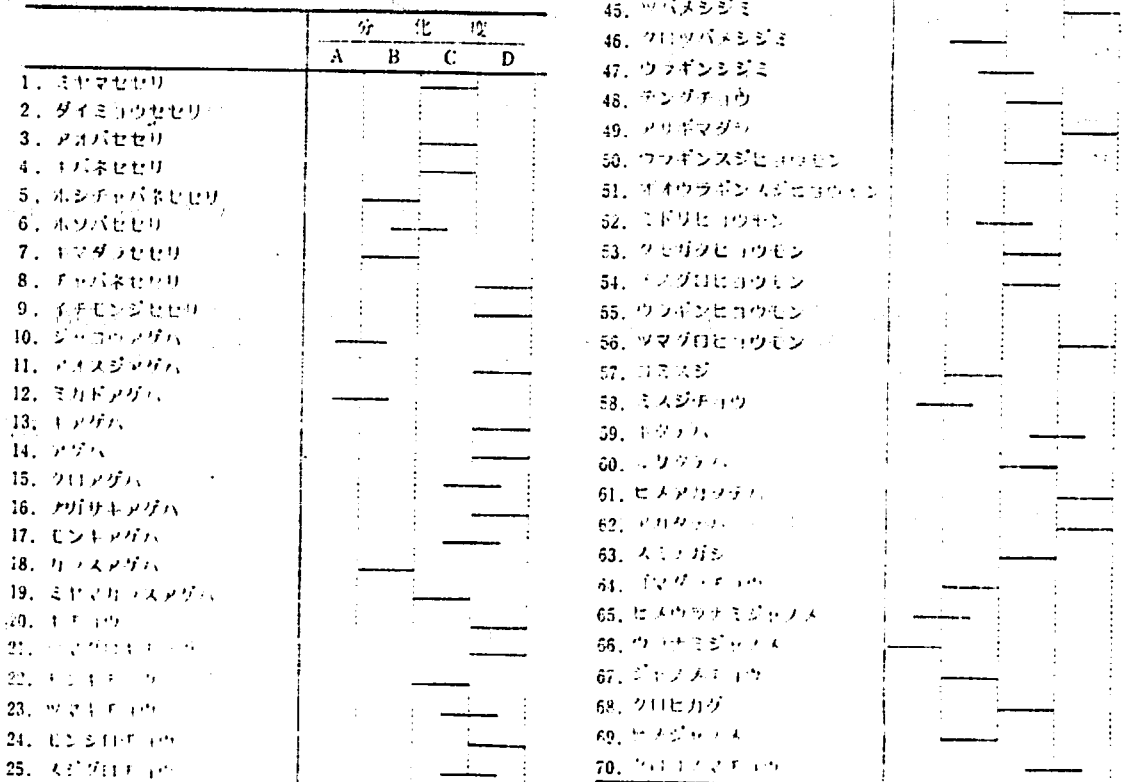
#### 4. 地理的変異からみた対馬の蝶相

長崎県島嶼のうち、対馬産蝶類には顕著な地理的変異が認められる種が少なくない。そこで対馬産全種の変異度(分化度)を次のように4つに評価した。

- A: 亜種と区別される
- B: 地理的変異が顕著である
- C: 地理的変異が軽微である
- D: 九州本土産とまったく区別できない

例えば標本量が少なく、単なる個体変異との区別が十分でなかったり、性・季節型によって差があつてA Bいずれとも判断できず見解が分かれそうな場合がある。その際には横線をA Bの途中に引いている。

図6. 対馬産蝶類の地理的変異度



以上を基に集計すると下記の通りである。

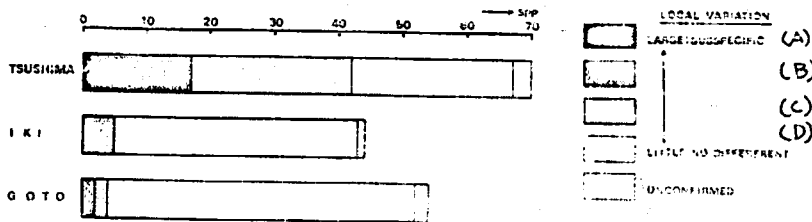


図7. 長崎県島嶼産蝶類の地理的変異度と種類数、亜種段階から差異がないものまで4段階に評価

これらのうち、特に問題が多い種について述べてみたい。

### α. ジャコウアゲハ

東北以西の西日本各地に広く分布し、山地～低山地の丘陵地を中心に生息する種である。

食草が海岸～低山地の疎林林床などに自生するウマノスズクサ科であるため、やや局地性がある。草原に出て各動植物を訪花することがあってもそのような場所では一般に個体数は少ない。

対馬では従来所産蝶類で最も個体数が少ない種と考えられていたが、本年その発生期と生息場所が判明し、多くの個体を得ることができた。確認できた産地は上村馬町河内・鵜浦・落土・泉・豊・比田勝で、河内～比田勝より北の極めて限定された場所に生息するだけである。

本種は原名亜種(日本本土)と台湾産 (*ssp. mansonensis* FRUHSTÖRFER) まで、屋久島 (*ssp. yakushima* ESAKI et UMENO), 奄美～沖縄 (*ssp. lochooana* ROTHSCHILD), 宮古 (*ssp. miyakoensis* OMOTO) 八重山 (*ssp. bradanus* FRUHSTORFER) 産について亜種名が与えられている。このように島毎に種分化が激しい種であるが、対馬産についても下記のような特徴が見出された。

	原名亜種(長崎産)	対馬産
翅長地色		
♂	絹糸状光沢がある黒色	黒色～黒褐色
♀	黄灰～灰褐色	暗褐色
後翅表外縁の半月紋	まが玉形で黄色	半月形で黄赤色
第7・6・5脈端	3脈端は直線状にならず、第6脈端が突出	3脈端は直線的に並ぶ
第7・6・5脈端の延長	尾状突起(第4脈端)の途中に達す	3脈端と第4脈端が直線的に並ぶ
後翅外縁の凹凸の切れ込み	やや凹凸がある	原名亜種よりやや激しい
尾状突起の長さ	長く太い	短かく細い

ただし胸部と腹部側面の紅色毛は原名亜種同様、背面上がることはない。このように対馬産ジャコウアゲハは原名亜種と一見して識別することができるが、亜種として区別され得るかは他の妥当性と共に今後検討されるべきものと考えられる。

対馬のウスノスズクサ属については

・ウスノスズクサ 佐護(中島, 1942), 全島(外山, 1936; 外山・松林, 1976)

・オオバウスノスズクサ 豊崎(中島, 1942), 同上

以上の2種が自生している旨の報告がある。しかし筆者らの海岸部250ヶ所(全島で400ヶ所)を調査した結果では前者は見出すことができず、後者はジャコウアゲハの生息地(中島の豊崎というのと一致する)で後者が発見できたただけであった。前者は極めて局地性があるようで、後者も河内～比田勝以南に自生している可能性は低い。それ以南については形態的に酷似したアオツツラフジとの関連を含め調査を要しよう。

ともあれ本種がこのような極めて局地的に分布する原因は食草要因以外に考えることができない。従って食草要因のため生息地が限定された結果、激しい種分化をとげつつあると理解される。

### β. カラスアゲハ

春・夏型共に翅表の色彩は本土産よりやや緑色が強い。前翅外縁に沿う白帯は、春型では前縁に向うにつれて著しく拡大し、また夏型もその傾向が強いが、♀では逆に若干狭くなっている。後翅表の前縁中央部青色部は本土産と同じ広さであるが、やや青味が欠ける。後翅亜外縁の半月朱色紋は春・夏型共にやや大きく、色彩もあざやかなことが多い。春・夏型共に小型である。

長崎県島嶼産の分化度と分化方向は下記のように表わせる。

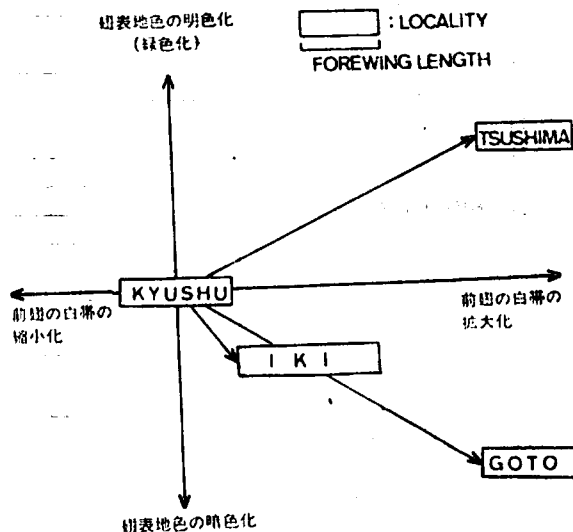


図10. カラスアゲハの形質からみた分化度と分化方向

## 5. 蚜馬の迷蝶

蚜馬では83種が報じられている。この中には迷蝶と呼ばれ、本来の分布域が本県よりはるか南に位置し、夏～秋にかけて一時的に飛来する種群を合計13種数えることができる。これらは大半が偶然に採集されるだけであるが、好適な条件に恵まれると見つけた食草で世代をくり返すことができる場合がある。しかし冬の到来と共に大半が死滅してしまうと考えられている。

しかし迷蝶といっても散発的に飛来するだけでなく子孫を残した可能性がない種や、逆に渡来地で食

草を見つけ、ほぼ定期的に世代をくり返すことができるホシボシキチョウ、カバマグラ、メスアカムラサキ、アオタテハモドキなどがあることは周知の通りである。さらにウスイロコノマなど、ほとんどの個体は飛来個体の子孫に由来することは疑いもないが、一部に越冬した可能性が否定できない種もある。一方、土着種でもヒメアカタテハ(江島, 1977) やウラナミシジミ(江島など, 1973 ; 江島, 1977) など一部に飛来してきた個体が混入している可能性を残す種なども知られてい

	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	計	
オキナワヒロウドセセリ																						1		1	
タイワンアオバセセリ																							1	1	
ホシボシキチョウ																	138		2					140	
ウスキシロチョウ																	4							4	
ウラナミシロチョウ																						1		1	
オジロシジミ					7																			7	
スジグロカバマグラ								1				2		1		79	7					7		97	
アオタテハモドキ				2	1		1	2			1	35		1	2	11	3			1				61	
タテハモドキ					1										1									3	
メスアカムラサキ	3	2						4	1			2	26	2	18		8	1					1	96	
リュウキュウムラサキ	1	1		1							1	21	1	1		24	2	2		1		3		59	
ヤエヤマムラサキ																1				2				3	
ウスイロコノマ	1		2												3		2			10		2		20	
	5	3	3	3	9	0	1	7	2	0	0	4	84	3	21	6	143	164	3	2	14	0	15	1	493

図11. 迷蝶各種の年別採集数(成虫)

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計	初見日	終見日
オキナワヒロウドセセリ			1				1	7.23	×
タイワンアオバセセリ					1		1		
ホシボシキチョウ				29	60	51	140	8.18	10.24
ウスキシロチョウ				3	1		4	8.2	9.6
ウラナミシロチョウ			1				1	7.21	×
オジロシジミ						7	7	10.6	10.17
スジグロカバマグラ				7	57	32	97	8.10	11.3
アオタテハモドキ				1	24	33	61	7.7	11.3
タテハモドキ				1	1	1	3	7.28	9.15
メスアカムラサキ					22	46	96	8.9	11.26
リュウキュウムラサキ		1	3	32	21	2	59	6.1	10.10
ヤエヤマムラサキ					2	1	3	8.15	9.21
ウスイロコノマ				7	10	3	20	7.17	9.27
合計	1	14	130	224	120	4	493		

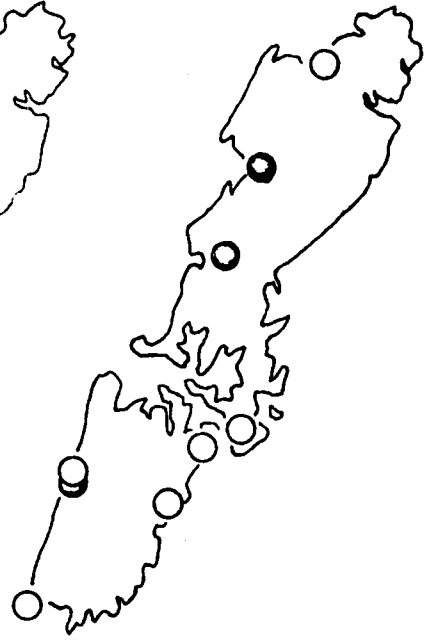
図12. 迷蝶各種の月別採集数



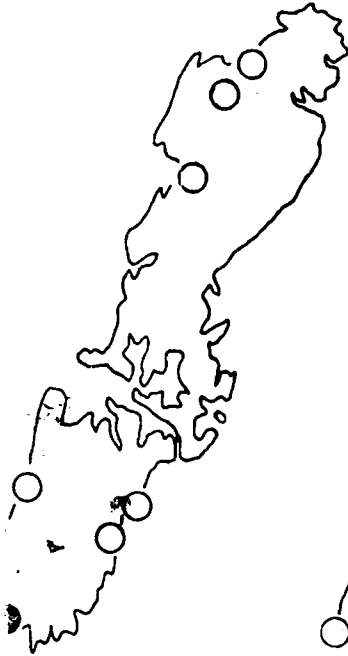
- ⊖ : オキナワビロウドセセリ
- ⊕ : タイワンアオバセセリ
- : ホシボシキチョウ
- : ウスキシロチョウ



- : オジロシジミ
- : スジグロカバマダラ



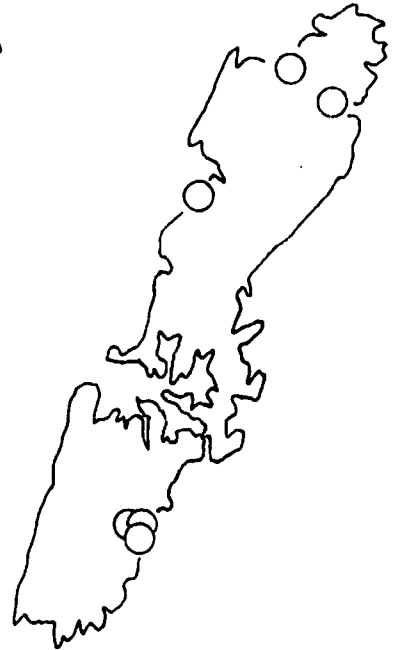
- : タテハモドキ
- : アオタテハモドキ



- : リュウキュウムラサキ
- : ヤヤマムラサキ



- : メスアカムラサキ



- : ウスイロジョノマチリウ

図13 沖縄産迷蝶13種の発見地

## 6. 対馬の蝶類の生態

対馬の蝶類については従来は分布の有無を中心とした調査が大半で、生態についてはツシマウラボシシジミと台湾モンシロチョウの断片的なものを除くとほとんど見るべきものはない。ここ数年間に蝶類に関して調査が最も進んだのは地理的変異と、生活史を中心とした生態の解明であろう。その中でも本邦では対馬に特産する台湾モンシロチョウとツシマウラボシシジミの2種についてはほとんど究明することができた。

### 1. ツシマウラボシシジミ

本種の分布地は従前知られていたほどがいものではなく、上対馬全域(河内一比田橋以北には生息しない)に及び、一部は下県郡の北部まで生息していることが判明した。

その生活史中、特に3〜4令(終令)になると、ヌズビトハギ属(*Desmodium*)の小葉基部を内側から傷を入れて下方へたらし、葉をつくる習性があることを明らかにした。このように造葉性をもつ種はシジミチョウ科でもTheclinaeには広範に認められるものの、ヒメシジミ亜科では本種が唯一のものと考えられる(江島・邑上・吉田・里山, 1978)。



図14. 越冬前終令幼虫とその造葉 1975年10月13日 上県町佐護 ヤブハギ

### 2. 台湾モンシロチョウ

対馬では全島(図)に分布し、生息地は基本的には日浦など(1978)の報告にはほぼ一致する。すなわち市街地や蔬菜畑、空地などではモンシロチョウが圧倒的に優勢であり山林に接する平地の空地などでは本種の生活の場となっている。特に一方が平坦で、一方が二次林や海岸林でおおわれた場所には必ず本種が生息する。このような場所は現在までに報じられた食草の主な自生地でもある。

春季には上記のような場所にくわえ流れの近くにタネツケバナ属(*Cardamine*)が生ずるような、かなり暗い谷筋でも生息する。また夏季には畑地や空地などモンシロチョウの生息圏にも進出することがあり混飛すること

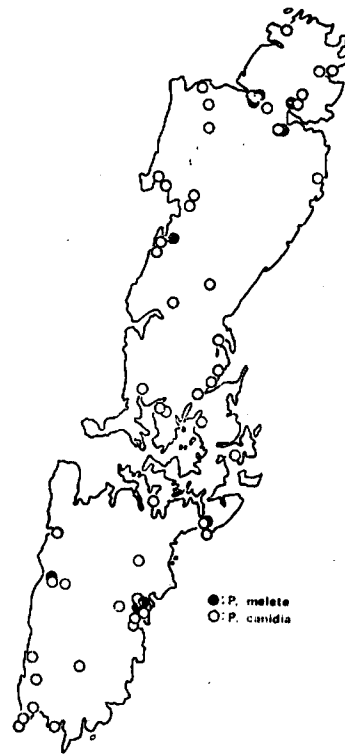


図15. 対馬における台湾モンシロチョウ(白丸)及びスジグロシロチョウ(黒丸)の分布地

ともまれては、食性はアブラナ科の7属11種に及び、中でもクヌギ・コナラなどのやや乾燥した林床に自生するハナズナが夏季の食草として極めて重要な意味をもっていることを明らかにした(江島・北條, 1979; 江島, 1980ほか)。本種は水辺のアブラ

ナ科を基本食草とする他のPieris属とは根本的に異なり、それらとは食性を違えることによって棲み分けが放り立っていることが伺える。従って本種は最近発見されたコキマダラセセリ(日浦, 1975)と共に、本来乾燥した草原性の種であることを強く示唆し、現在ではその生息域



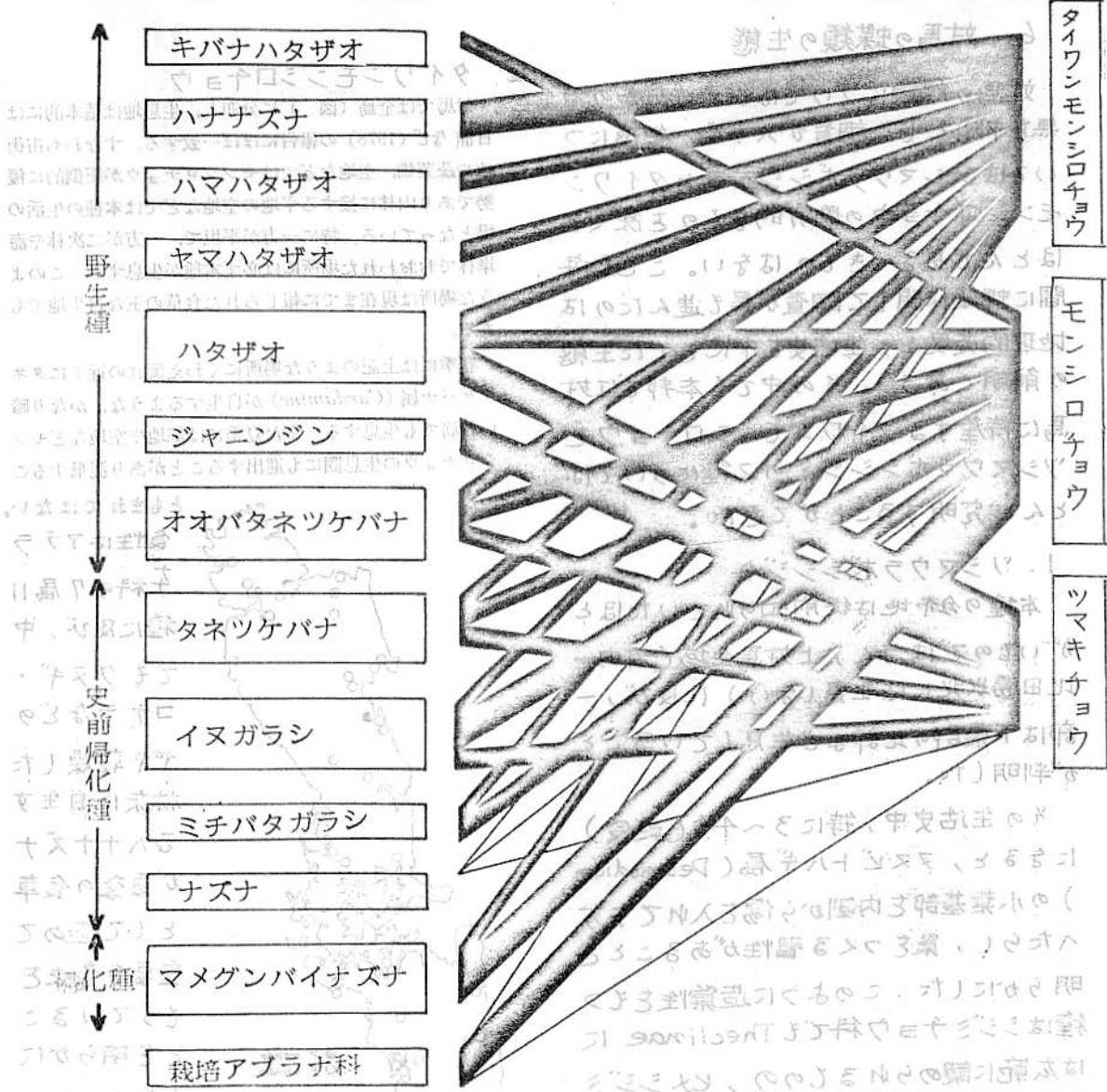


図16. 村馬産のアブラナ科食シロチョウの食性と其の利用頻度の相互関係



は著しく制限されているものと考えられる(江島・境・対馬高校生物部, 1980)。

対馬産 *Pieris* 属相互の種間関係とハッチンソンの超多面体ニッチで表わした

結果は下記の通りとみ考えらる(江島, 1980)。

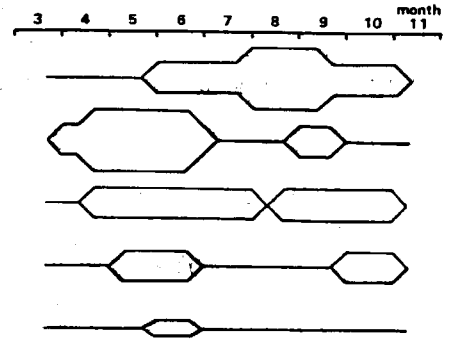
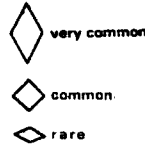


図17. 対馬におけるタイワンモンシロチョウの食草の月別利用頻度(3段階)

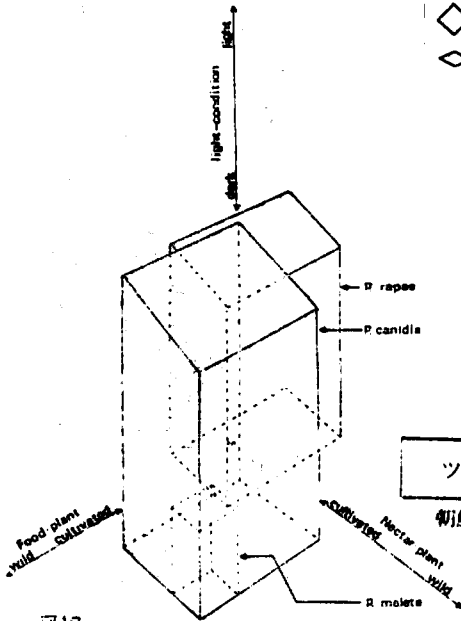


図18. ハッチンソンの超多面体ニッチで表わした対馬産 *Pieris* 属3種の種間関係

### 3. クロツバメシジミ

クロツバメシジミはアルタイ、中国南部~北東部、朝鮮を経て西南日本に局地的に分布する。北九州では各地の海岸部や山間岸崖に自生するマンネングサ科を食草として生息している。九州各地の食性の報告から、“朝鮮から、海岸地帯や山地にも入ることができるツメレンゲを食しながら対馬 → 壱岐 → 九州本土へと分布を拡大し、日本本土への足がかりを得たと考えられる。ツメレンゲの群落の近くにあるマンネングサ、中でも海岸地帯で優勢なタイトゴメがクロツバメシジミの分布拡大に大きく寄与したのであろう。加えて対馬ではツシマンネンへ、西九州特に長崎市周辺や五島列島ではタイトゴメを介してナガサキマンネンへ食性を転換することで更に広い分布域を獲得したと推定される。一部ではイワレンゲやアオノイワレンゲ、栽培品マンネングサ(メノマン

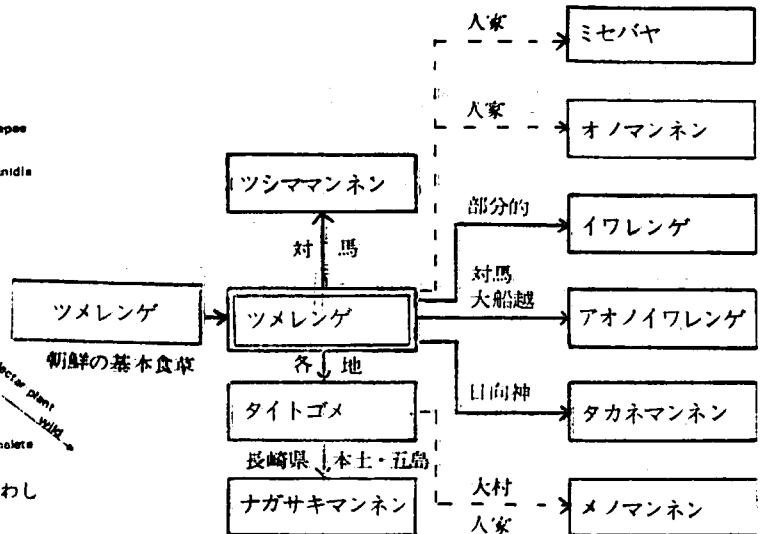


図19. 九州におけるクロツバメシジミの基本食草と食性転換予想区

ネン?、オノマンネン、ミセバヤ)、山間部のタカネマンネンへ転換し、現在のクロツバメの生息域が完成したと考えられる。”以上のよう

に報告しておいた。

#### 4. その他の種

ジャコウアゲハは上舩馬町の河内-比田勝以北に生息する。このように局地性が強い理由は、食草のウマノスズクサ属が極めて自生地が限られていることに起因することを明らかにした(江島・境・舩馬高校生物部, 1980)。

また、千ヨウ類の交尾飛翔習性(江島, 1979), 吸排水行為(江島, 1977)や吸水行為全般(江島, 印刷中), 訪花植物のまとめ(江島, 1980), アゲハ千ヨウ科の食性と分布との関連(江島, 1980)についても記しているが、省略する。

その他、生態に関する知見を次の表にまとめてみた。

この中で発生期については6上(1)→6下(30)とあれば、6月上旬から6月下旬に発生し、それぞれの初見・終見日が6月1日, 6月30日という表わし方をした。

成虫の食餌の欄で吸水とあるのは含の記録を表わし、早吸水, 吸排水行為, 吸い戻し行為, 散水行為, 水浴行為はそれぞれ, 早, P, RI, S, Bの記号で表記した。

交尾飛翔形式は繁雑さをさけるため、下記のように略記している。

- M: ←含+早(早が含に引かれて飛翔)
- F: ←早+含(含が早に引かれて飛翔)
- E: 交替飛翔(含早交互に他方を引っぱって飛翔)

以下の記録は原則として報告されたものだけで、未発表のものは含まれていないが、食草には一部未公開のものを挙げた。ただし観察者は

E: 江島 S: 境良朗 田代: 田代博人  
で、観察地も付記している。



図20. 舩馬でのクロツバメシジミの産地の食草〔丸印〕と、その自生概念図

食草	自生概念図	植物名
①	-----	ツメレンゲ
②	-o-o-o-o-	ツシママンシノヅク
③	-.-.-.-.-	タイトゴメ
S	-x-x-x-x-	アオノイワレンゲ

#### 5. 後記

本文を記すに当たり、色々ご教示いただいた境良朗氏及び、平間一幸君ら舩馬高校生物部員諸君には厚くお礼申し上げたい。

科名	種名	食草	成虫の発生		成虫の食餌		訪花性		翔交形式	越冬態	
			回数	発生期	昆虫	植物	吸汁	訪花性			
								木本			草本
セセリ科	1. ミヤマセセリ	コナラ	3F(21)→5中(13)	1				0	0		
	2. ダイミセセリ	—	8上(7)など3例の記録	不明							
	3. アオセセリ	リュウキュウアワブキ [知板:S]	5上(3)→6中(17), 7上(7)→8F→9F	3	0			0			
	4. キバナセセリ	—	5F(27)→6F(26), 7F(21・22)は一部	1	0			0			
	5. 赤ヤバセセリ	—	6中(18)→7中, 7F→9上, 9上(3)→9F(23)	3	0			0			
	6. ホソバセセリ	ススキ	6F(27)→8上(9), 9中(12)は一部	1	0	P		0			
	7. キマダラセセリ	ススキ, オレシバ, オオアブラススキ, ササsp.	6上(5)→7中, 7中→8F(29), 9中→10上(10)	3				0			
	8. ヤバセセリ	4ガヤ, ススキ	5中(18)→7, 7F(21)→9, 9F→10F(27)	3		RL		0			
	9. 4本ジセセリ	イネ, エイコログサ, ススキ, オオアブラススキ	5上(8)→6中(16), 7F→9→11上(9)	3		B		0			
アゲハ科	10. シヤコウアゲハ	オオバウマノスズクサ [落土:E・S]	4F(30)→5F(23), [7上→7F], 8上(5)→[8F]	3				0			
	11. アオスジアゲハ	タブノキ, クスノキ [今屋敷:S]	4中(13)→6中, 6F→7→9F(25)	3	0	P		0	F		
	12. ミカドアゲハ	オガタマノキ, タイサンボク	5中(18)→6中(18), 8F(21)は一部	1							
	13. キアゲハ	ハナクド [破石刺:S], ハヤゼリ [斑藪染:E]	4上(5)→5F(21), 6上(2)→7→8, 8F(29)→10上(4)	4				0	F		
	14. アゲハ	ナツミカン, クニシユウミカン, サンシヨウ, フユザンシヨウ, カラスザンシヨウ, カラタチ, イナザンシヨウ	3F(27)→5中, 5→7上, 6F→7→8→10中(7)	4	0			0	F, M		
	15. クロアゲハ	ナツミカン [宮谷:S], サンシヨウ, ミヤマシキミ, カラタチ	4上(10)→5中, 5→7上, 6F→7→8上(4)→10上(7)	4	0			0			
	16. オガサキアゲハ	—	7上(20)→9上(5)の記録あり	3				0			

図21. 好馬産地産蜂の生態一覽表

名 種 名	食 草	発 生 期	回 数	成 虫 の 食 料		訪 花 性	製 法
				吸 水	吸 汁		
18. カラスアザハ	ハマセンダン(局地的), ナツミカン, カラスザンシヨウ	4F(26)→6上(5), 7上(3)→8→10上(3)	3	○	○	○	成虫
19. ナツアザハ	カラスザンシヨウ, ハマセンダン(局地的), キハダ(栽培)	4上(1)→6上(5), 6中→8上, 8下→10上(10)	3	○	○	○	成虫
20. キキョウ	ヤハズソウ, ミヤコグサ, シバハギ, メドハギ, ネムイキ, マルバハギ, ナマバギ	→5中(13), 5中(17)→7上, 6下→7→8, 9→10→	4	○	○	○	M.F (稀)
21. ツマクサ	カワラナツメ	→4上(5), 5中(20)→9, 8下→	不明	○	○	○	M
22. モシロウ	シロツメクサ [豆酸: S], ミヤコグサ, ウマゴヤシ, レニゲ, ダイズ	2下(24)は一群, 3下(24)→4下, 5上(2)→6→7→8→	5	○	○	○	
23. ツマキョウ	オオバタネツバタ, タネツバタ, ジャニンジン, イナガラシ, ハタザオ	4上(1)→5中(16)	1	○	○	○	
24. モシロウ	オオバタネツバタ(稀), オオバタネツバタ, タネツバタ, イナガラシ, ミチバガラシ, ハタザオ, ハナズナ, ナズナ, マグンバイナズナ, キヤベツ, タカサ, ダイコン, アブラナ, ハボタシ, セイウクウヤクウヤク, キバチハタザオ [豆酸: E]	3上(1)→11中(16)	不明	○	○	○	M
25. ツグロウ	—	5上(5)→10上(10)に記録	不明	○	○	○	
26. シロウ	ハナズナ, ヤマハタザオ, ナバツバタ, ナズナ(稀), タネツバタ, イナガラシ, ミチバガラシ, ハタザオ, ハマハタザオ, マグンバイナズナ	3下(20)→5上, 5下→6, 6中→7上, 7上→8中, 8下→9中, 9下→10中→11上(16)	6	○	○	○	M
27. カシ	シラガシ, カシウ, コナラ, クヌギ	→5中(20), 6上(8)→7, 7下(21)→9→10→	4			○	成虫
28. ナツアザハ	—	→不明, 6上(3)→6下(23), 8上(8)→9→10→	4			○	成虫
29. アカシ	—	5下(24)→6下(21)	1			○	
30. ナツアザハ	コナラ [濃部: S, 大船越: E]	6上(3)→7下(23)	1				卵

科名	種名	食草	成虫の発生期		回数	成虫の食餌		訪花性	翅の形態	越冬態
			発生	期		餌	本			
シジミ科	31. キリシジミ	アカガシ	7上(9) → 9中(19)		1		○			卵
	32. ウラジロシジミ	カシワ	5下(27) → 6下(29)		1					卵
	33. オノドリシジミ	コナラ	6上(3) → 7上(1)		1	○				卵
	34. トラフシジミ	マルバウツギ	3下(27) → 6上(6), 6中(11) → 8上(8)		1	○	○			卵
	35. ベニシジミ	スイバ【安神：E】	4上(8) → 5中, 5下 → 6下, 7上(6) → 8, 8下(23) → 11中(11)		4		○			幼虫
	36. ゴイシジミ	タケノコ	5上(5) → 6上(9), 6中(18) → 7, 7中(18) → 9 → 10下(6)		4	○				
	37. 7ロシジミ	—	7下(25) → 8上(2)		1					
	38. ウラナシジミ	4ヨウセンキハギ【豆蝽崎：E】 イゲシマム【寄居：S】ナテハギ【豆蝽崎】 カタバミ	7中(17) → 8, 8下 → 9 → 10 → 11 → 12上(9)		4		○			
	39. ヤマトシジミ	ミヤコグサ	4上(8) → 12上(9)		5-6		○	F		
	40. シロアジシジミ	—	5上(4) → 5下(31), 7下(21) → 8, 8中(16) → 9下(23), 10上(4) → 11中(11)		4		○	F		
	41. ルリシジミ	7ズ, 9ラノキ, 19ドリ【今屋敷：卵代博】	3上(6) → 5上(8), 5下(17) → 6, 6下 → 8, 7下 → 9上 → 10上(10)		5	○	○	F-E		
42. 9ノハシジミ	—	7下(28)		不明						
43. サツマシジミ	—	6中(13) → 10下(30)の記録あり		不明						
44. ツシマクラボシシジミ	フジカンゾウ, オオバアスビトハギ, ヤブハギ, アスビトハギ, マルバアスビトハギ	5上(5) → 6上, 6中 → 7上, 7下 → 8上, 8下 → 9上, 9下 → 10中		5	○		F		老熟幼虫	
45. ツバシジミ	メドハギ【豆蝽崎：E】 ヤハズソウ	3下(24) → 5中, 6上(5) → 7上 → 8 → 9 → 10下(27)		5	○	○	F-M			
46. クロハシシジミ	ツメレンゲ, アオイワレザ, ツシマンネンザ, 9イトゴメ, ミセバヤ(栽培), オノノネン グサ(栽培)	4中(12) → 5中(17), 5下(22) → 6中, 6下(22) → 7上, 7中(16) → 8上, 8下(4) → 9下, 10上(4) → 12中(15)		6		○	F		幼虫	
47. クチシジミ	7ズ, ナツフジ	→ 3下(28), 6上(3) → 7上(6), 7中(15) → 9上, 9中(15) → 10 →		3	○				成虫	

名	種名	食草	成虫の発生期		回教	成虫の食餌		訪花性		翅尾形式	越冬態
			発	生		吸汁	他	木本	草本		
	48. テンゴウコウ	エノキ	→ 4F(29), 5F(23) → 10中(17) →		1	○	○	○	○		
	49. アサギマダラ	キジョラン [ 巻良山: E ]	4F(26) → 6中(12), 7上(8) → 8F → 9 → 10F(31)		4					○	
タ	50. クラギンズ ヒヨウモン	-	6上(1) → 10中(24)		1	○				○	
	51. オウクラギン ズヒヨウモン	-	6上(7) → 10上(10)		1					○	M
テ	53. 元ガタ ヒヨウモン	-	5上(3) → 11上(8)		1		♀			○	
	54. メスグロ ヒヨウモン	-	5F(23) → 10中(17)		1		♀			○	M.F
ハ	55. クラギン ヒヨウモン	-	9F(29), 10上(2) の記録あり		1						
	56. ヲアノロ クモン	スミレ [ 宮谷: S ]	4中(16) → 6上(7), 5中(12) → 7中(16), 7上(6) → 8中, 9F(23) → 10F(23), 12F(24)		5					○	F
4	57. コミスジ	クズ [ 知極: S ], スズバトハギ, ナツアジ, ササゲ	4中(15) → 5F, 5F → 6下, 7上(10) → 8中, 8F → 10中(16)		4		♀			○	M.F
ヨ	58. ミスジコウ	カエデ SP.	5F(25) → 6F(25)		1						
ウ	59. キタテハ	カナムグラ	→ 4F(30), 5中(20) → 6F → 7F → 9中(18) →		4		D			○	
	60. ルリタテハ	サルトリイバラ	→ 4F(26), 6上(4) → 7上 → 8F →		3					○	
科	61. ヒメアゲハ	ヨモギ	→ 4上(10) [ 成虫 ], 4中(16) → 5 [ 成虫 ]		5~6					○	
	62. アカアゲハ	サイカイヤブマオ [ 落土: E ], カラムシ イラクサ, アキニレ	5F(27) → 6, 6F → 7, 7F → 8F → 10上 → → 5上(8) [ 成虫 ], 4中(16) → 5F → 7上 → 8 → 10上		5					○	
	63. スミナガシ	-	5F(25) → 6, 7F(21) → 9中(16)		2					○	
	64. オオアゲハ	エノキ	5中(17) → 6F(22), 6F(29) → 9中(13)		2		♀			○	

科名	種名	食草	成虫の発生期		成虫の回数	成虫の食餌	訪花性	翅の形態	越冬態
			発生	期					
シヤノメ科	55. ムラサキ	-	7F(29) 9   例のみ	不明					
	66. ムラサキ	-	5中(20) → 6, 6中(20) → 8, 8F → 9. 9F → 10F(24)	4			○	F	
	67. シヤノメ	-	7上(9) → 8F(27)	1			○	F	
	68. 7.ロビカ	マダケ, ヤダケ, タケノコ sp. (2種), カンナク, メダケ, フマササ, オカササ		4F(29) → 6上(7), 6F(25) → 7F → 9F(26)	4		○		F, M
	69. ヒメシヤノメ	-	5F(22) → 7上, 7中(17) → 8, 8上(5) → 10中(12)	3				F	
	70. 7.ロビカ	ジュズダマ	7F(31) → 9中(15)の記録あり!	不明					
	71. ムラサキ	-							
	72. ムラサキ	-							
	73. ムラサキ	カワラケツメイ					○		
	74. ムラサキ	-							
	75. ムラサキ	-							
	76. ムラサキ	キツネノマゴ					○		
	77. ムラサキ	-							
78. ムラサキ	スベリヒユ								
79. ムラサキ	サソミイモ(差卵)								
80. ムラサキ	-								
81. ムラサキ	-								
82. ムラサキ	-								
83. ムラサキ	-								



参考文献

- 江島正郎(1977)クヨウの吸水行為(1), 昆虫と自然, 12(6): 11~14, 1 pl.  
——(1977) " (2), *ibid.*, 12(7): 9~13.  
——(1977)長崎県の蝶とクの生活(クの8) —長崎県産の地理的変異 —, 月刊むし, (81): 5-10.  
——(1978)長崎県の蝶とクの生活(クの9) —長崎県産の地理的変異 2 長崎県島嶼産カラスアゲハの地理的変異 —, 月刊むし, (83): 9-16.  
——(1978)長崎県の蝶とクの生活(クの10) —対馬の蝶類の分布について—, 月刊むし, (85): 5-10.  
——(1978)長崎県の蝶とクの生活(クの11) —長崎県の迷蝶(1) —, 月刊むし, (86): 19-24.  
——(1978)長崎県の蝶とクの生活(クの12) —長崎県の迷蝶(2) —, 月刊むし, (90): 23-26.  
——(1978)長崎県下で観察した蝶類生態記録, *Canidia*, (3): 43-70.  
——(1979)長崎県蝶類でみられた交尾飛翔習性, *こがねむし*, (35): 44-55.  
——(1980)クツバメシジミの九州での基本食草は何か, *ちょうちょう*, 3(3): 52-73.  
——・北條篤史(1979)対馬におけるタイワンモンシロクヨウの食性, *昆虫と自然*, 14(3): 40-45.  
——・境良朗(1978)対馬産蝶類の発生期, *Canidia*, (3): 88-96.  
——・ほか(1978)ツシマウラボシシジミの生活史, *蝶と蛾*, 29(1): 47-65.  
岡一幸・ほか(1977)対馬産蝶類採集記録, *Tsushimaanus*, (10): 2-27.  
——・ほか(1977)タイワンモンシロクヨウがなぜ対馬にいるか, *対馬の自然*, (11): 2-45.  
浦島(1976)対馬蝶類の生物地理学的考察, *対馬の生物*, p. 429-440, 長崎県生物学会刊(長崎).  
——・など(1978)対馬産タイワンモンシロクヨウ —ピエリスノート 2—, *蝶と蛾*, 29(2): 97-110.  
上益朗(1976)ツシマウラボシシジミとクの生態, *昆虫と自然*, 11(6): 7-14, pl. 2-3.  
田明夫(1976)対馬の蝶類, *対馬の生物*, p. 403-428, 長崎県生物学会刊(長崎).  
——(1977)寺崎・対馬の蝶の分布と生活, *寺崎の生物*, p. 375-407, 長崎県生物学会刊(長崎).  
日暮美明・など(1978)長崎県生物学会対馬総合学術調査蝶類採集目撃目録, *Canidia*, (3): 5-28.

S.55年度

# 合宿記録

WRITTEN BY Ben  
[山口勉]

・昭和55年 7月 24日 木曜日 晴れ

補習抜け出しに なんと成功したので、車の午配をすばく、家に向かう僕に対する増田の目がなんとなく白々しく、しかし、その時はまさかアイツがサボルつもりとは気付かなかつた。

家から学校へ荷物を受けとりに行くと、クラブ活動の人々の目は私服の僕にキビツク 向かっているみたいだ。

阿須⇒南室⇒小浦を経て、他に一台も車も見当たらない国道を制限速度キリキリで走る愛車カーラ 20 バンの ボディラインの何と美しいコト。

遠くから車をふる田圃のウツ達や、田舎の子供らに微笑返しをしつつ、カーラは万間橋を越えた。

ここまでくれば 目差す 御岳口 はもう目前。  
僕は“御岳”のこども“オニタケ”と発音するか、  
普通の人には“ミタケ”と発音するところで、出発前のミーティングではみんなにバカにされた。

3:45分 往御口 到着 !!

全員集合。しかし、増田がいなかった。

アイツの目に疑念を感じなかつた僕が腹立たい。  
テントの建て方が理解できず、結局サボって、川原で、トンボをとっていた。(錆れい目 カワトンボ科 ハグロトニボ)

水の中では、カワムツ、タカハヤ、アゴヒゼ、ヌマエゼが遊んでいる。

私が目差す ヨツノホリよ、イズコ。

歌野サニ達 がやてきたら、何といたるうかと思つて  
うち、本当にやって来た。

「バン、テントは出来たトカ!?」「ハ……ハ、ア、ソレカ。」

後の事は、ご想像におまかせする。

夕食のしたくにとりかかたのは5時をまわった頃。

Menu は コーヒーと 弁当、グツタカト……。

飯粒を川に投げ入ると、イヤツイ 魚たちが 群らかってくる。  
イヤツイやつらだとは思ひながら、「なるほど、宗家10万石の  
対馬といえ、富めるのは 城下のみ、ここらの庶民は乏しい  
暮らしをしてゐる。」と思ひなおし、大量に、とう二十リ飯二  
〜三個分 ぐらい 投げ入れてやった。

(翌日の調べでは、下流の溜まりに タクサン しずんでい  
たらしい。)

夕食後は、僕が作った 講想2冊、製作2週間、  
費用200円の特製“四つ手網”の 実験、しかし……tant、tant、  
竹が折れてゐるではおれませんか、オタクパイ。

冷静な僕は、みんなにやつあたりするまもなく、静かに  
網をゴウしてやりました。

Past 30 Nine.

増田はサ、ベストテン を見ているたると、話し  
ながら、Bed-in。

尚、モツキヤンの 学説では、このあたりは 御岳原住  
民の 生息地であったとの事、明日、音調査に出かけた

話していた。

僕は早田先輩を見存らって勉強をしようと思ったが、  
睡魔に負けてできなかった。

。 7月 25日 金曜日 晴れのち曇り のち暴風雨

昨日は夜遅くまで歌野先輩とモツちゃんの空手談義を  
聞かされ、おかげで今日は眠くて仕方がない。

しかし、どうだ、今日の朝の炊事当番は僕の班なのだ。とび起きて、  
朝一番の水をくみに行く。

Menu は コーヒーに インスタントのみそ汁だった。

誰もウマイ、ウマイといってくれなかった。ウマクナイ、ウマク  
ナイと、僕も思った。コーヒーは濃すぎ、みそ汁は淡  
すぎたのだ。

— この日の予定 —

千俣 蔭山 — 平間, 杉原, 宗綱, 石山,

御岳 ————— 歌野, 本石,

御岳口 ————— 清原, 山口 (僕のゴトだ)

大星山 ————— 大木, 阿比留, 江口, 他に江島先生,

そうそう、大事な人を忘れていました。

“平間 - 幸” という OB の方で、今、琉キョウ大学に行かぬ  
人が、この合宿に参加された。


調べによると 入学後一年、二年、三年の三年間、生物  
部長をつとめていたそうで、大変な変態なとうである。

蝶に対する愛着心は江島先生に匹敵するそうで、得意  
技は、キニキョールによる下級生<sup>2</sup>いじめ。

みんなが 蠶の採集に向かっていたから、僕はキヨバーと二人、幻のヨシノボリを発見すべく、川を逆登った。7月といえと木は冷たい。ハイ、ハイ、言いながら川を登る二人の姿がもし、猟師さんに見えたら、おもしろくアノセ行きたつたろう。

そして、出会いの時は来たりぬ。

今、足もじも泳ぎさった青く光るカゲは、マギレモない、ヨシノボリ。きょうより速く僕の糸もす網は舞った。蠶のように。計5匹のヨシノボリ（内 含 3 匹、早 2 匹）を手に、意気揚々と、帰途についたイ英らは、一足早くテラについで、ラジオのスイッチを ONにした。

“台風7号はその進路を北東に変え、今夜半ごろ、対馬海峡に達する予想です。” がア  ン!!!

何を思ったか、キヨバーは どうせ映りこのないT.V をいじり、僕は、荷物もまとめた。

暴風雨のためか みんなも早く帰って来て、ポツリポツリと来る雨より先に、風呂代わりの海水浴に行く。

海岸は、ナント ジャークの設備まである高級海水浴場で、その快適さは、僕たち以外の海水浴客が1人もいない事が証明している。しかも、なお、この海岸は、沖に行く程浅くなる、世界の七不思議なのである。ホセイドンのたたりを吹かれ、テント地に戻った僕たちは、夕食（Menu は忘れた）も早々に、暴風雨、対策会議を開き、雨もリテントの住民をどうするか考えた。雨がたんだん強くなる。

とにかく、今日は豪雨ということ、テントにもぐり込む。

歌野先輩やモツチャンは、雨もテントの住民がやって来ては、無視しようとして話し合い、僕は口でこそ「これはカワイイぞうだ。」と言ったが、腹の中では、みんなに賛成していた。

そして忘れない PM: 10:25。

「雨もがしてまた。入れてくれエ〜。」

このあわれな一声に感涙した僕は容易に受け入れを認めた。

三人用テントに七人が重なれ合い、増田は今ごろゆつたりとベッドに入ってしまった。33 年、と思いつつ、眠りについた。

早田先輩のように賢く勉強しようと思ったが、この状態では先ず無理のようだ。

雨はますますひどくなる。雷も近づいてきたようだ。

P. 今 近くに落ちたい。

7月 26日 土曜日 起きた時 晴れ。

あの人がいざの中、いつの間にか寝いていた自分が不思議でならぬ。テントののぞき窓から見る外界は日光にあかれています。昨夜、モツチャンが、「明日の朝目ざめると、このテントは流れたのって、海に出ているにさかれない」と新しい学説を立て、これをしりに歌野先輩にうけていたが、どうやらその学説ははずれたようだ。

そのモツチャンは、御岳原住民は昨日の雨の中、どうすごしたのかと、しりに心配していた。

江島先生は各家庭に T-el するため、う回して街にいったところで、これにしてモエーチャン (This is my fat-

-her's nick name.) が来るとは 思って も みて いたよ。

江島先生のいなり間、遅い朝食をとりながら、歌野先輩とモリヤニが御岳原住民に襲われた話を聞く木た。

## スワップ

二少年、御岳にて御岳原住民に襲われる!!

新聞によりますと、長崎県、対馬の御岳にて合宿中の二少年が、幻の御岳原住民に襲われたとあります。

その日、7月25日、御岳山中をさまよって歩く少年A(17)と少年B(16)が、ふと、自分たちの歩いていっているのが、同じ道をグルグルしていたのにすきりな11の11に気付かず、「これはウツサに聞こえて御岳原住民のワナに落ちたらしい。」と、恐れをなして逃げたとき、多くの橋道の中、一つもまぢがわらずに山頂に上ったという事で、その道中、一度ならず、後ろでカチカチ、カサカサという音を聞いたという事です。

しかも、少年らが立ち止まると、原住民はこれに気付かず、二、三歩歩いて止まったときで、対馬名誉教授 M. E. K (29, 未婚) の話によると知能指数は170をキルという事です。

少年A「最初、B君から話を聞いた時は信じなかったのですが、いやア、恐怖を実感しました。」

少年B「僕の学費は正しかった。今後はなんらか意思の交通を計りたい。そう思っています。」

その後、近島先生も帰って来て、蝶の採集に、みんなが出かけているのは、オドロイタ。

僕にはもう、そんな元気は残っていない。濁流のほとりにたたずみ、静かに川魚の動きを見る。宮本武蔵はこうやって智を開いたのだろうか。

今の僕には 智りを開く余裕などない。Home sickにかかってしまったのか、あと2日～あと2日。

盲めぼろで網をふると、何と～十センチヨツ/ボリの、これも8cm級の大型が入ってきた。エアポンプのスイッチを入れる。こんな水は、細かな震動も又、心地よい。

12:00すぎ、水の流木も、ここが河上のせいかわる。ヨツ/ボリが7匹、7匹も(内、♀2匹、♂5匹)年に入ったのである。

今日は、もう、後の事は何も覚えていない。

17日か夜、みんなは“大富豪”というカード・ゲームに11と12、そんなものつまらなれと思った僕は変る。もう変る。←

7月 27日 日曜日 晴れ時々曇り

合宿も4日目に入り、みんなカナリグロッキーな中で、歌野先輩と平間OBの両氏のスタミナはとどまる所も知らず、聞く所によると歌野先輩の標準エネルギーは116万ギルがワットパータと云うことだ。

増田の事も考えられない。

ケン侍の朝食は今日は彩りをとるべく、コーンスープ、マッシュルームスープ、チキンコンソメ、野菜スープ、ポタージュのオン・パレードとなった。



採集も奮わず、全員バントの中でゴロゴロしていた。

悲劇が起ったのはその直後で、No.2のテントに僕とオーチと、歌野先輩、平野OBが寝てバツ211たまでは1111が、突然、歌野先輩が僕の頬に New Ban 16 formen のあの鼻にツンと来るスプレーを吹きかけてきたのである。

思わずセキ込んで助けを求めたく平野OBの方を向いた僕ではあったが、ア、何としかし、平野OBの手にはキンキョールのスプレーカンが握られていた。

二、三発直撃をクラッたオーチは、やっぱりと外ハエスケープ。一人残った僕は逃げるチャンスを失ない、二先輩のオモチャにされた。

視覚以外の感覚を失った僕は、まだ完全に水がひききっていない川で応急処置をすると、No.1の先生達のテントへ逃げ込もうとした。しかし、彼らは、僕の入室をカタクナにこぼした。自分に被害のふりかかるのを恐れるとは何という島国根性!! 友情とどちらが大切なんだ。  
(「お前の友情なくかイラん。」と言われようだと思っていたが、事実、そう言われてしまった。)

息をとりなほし、夕食をすませると、レクリエーションのスイカ割りの前に、最後の後カづけ。ここまで来ると、キャンプといは11よ後おれといふ実感があてくる。

と、ここでも、小さな大事件が起った。  
焼け残りのゴミの中から、星、スターのマークの、しかも青いブリーフが見つかったのだ。

江島先生はしきりに「ネエ、これ誰の!?!」「正直に

自状しなさいよ。」と言っていた。本人にしてみれば可受どう  
な事だが、回りの者からすれば、こんなおもしろい事はない

ところで、その「ブルー・スター・パンツ」の持ち主の件だ  
が、犯人は、その犯行を最も強く追及するものであり、とり  
う三流 スイ理小説あたりの定石から、江島先生な  
の癖はないかとの言もあがった。既に和子、僕からではない。

結局持ち主が分からず、そのブルー・スター・パンツはそこに  
放置しておくことにした。その夜、モツヤンは「今夜はさ  
らに御警備隊員がやしを掃  
て帰れ。神ダチにまげを拜むの徳運は無い。」とま  
たもや新しい学説を打ち立てた。おまゝ

江島先生のオゴリによるスイカは、山口組系直系の  
ヤーサンのエツナンが、その境刃をつとめた。

ダボツヤツに腹まき、それに手刃、ほうちあうのよく似  
合うエツナンは月の光りにてらされて、神光しさであった。

僕はスイカは嫌いだ、焼いては割には、僕は一番よく  
食べた。江島先生のオゴリと分事、銀から離れず、志  
村ケンの真似は、百もたかぶたは、

その江島先生はすみの白っほり所を今にかいてあり、  
その学はヤーサンのエツナンと子姪称と云ふ。

その夜は自由と云う事で、僕は始めて「大富豪」という  
カード・ゲームをやった。

面白い事は面白いが、貧民、平民、大富豪とあって、  
どうしても貧民から上がれなかったのが、空しくも思えた。

夏の夜に、空しい笑いが土ひしくヒビイタ。

もう、増田に対するウラミなど消えてしまっている。(と、書いちゃった  
のを見たとき、また消えていたようだ。)

カード・ゲームに夢中になり、早田先輩の様に賢く勉強する  
ことは出来なかった。

。 7月 28日 月曜日 晴れ

The last day!!

遅く起きたので、あのブルースターパンツがどうなったかは分から  
ない。やはり原住民が持っていたのだから。

今日は後は別に何も無い。テントたたきも思ったより早くすんだ  
し、バスで帰る者は、もう朝早くたっていた。

国道をいって待つこと30分。霧の向こうに見えるのは我が  
エーカンカーとローラ 20 バン。

後は寝ていてよく覚えていない。途中で飲んだコーシーの  
ホロ苦さをかすかに覚えている。

1980年、7月28日、我々生物部の有志たちは  
その人生の何百分の一である五日間を燃やし、薙  
した御岳口(キャンプ場)をあとにした。

(特にモンキンは御岳原住民に、僅は  
ヨシノボりに、別れを惜しんでいた。)

Good by!

fin  
7/  
1980 / 28

紙面のつ合により、“ウツウツ増田日記”は載せ  
られませぬ。聞きた人は 1の6 増田厚光のところに  
まで来て下さい。

## この2年間のこと

杉原孝太郎 (2年・副部長)

生物部に入部してもうすぐ2年になるうとしている。入部して早々に白岳にキャンプに行ったときなどは、屋間のうちは暗れていたが夜になると大雨になってテントの下を水が流れているという始末だった。

それ以来、生物部がキャンプをしようと必ず雨が降るという変なジンクスまふまふしてしまいました。それにもめげずによくあちらこちらと、キャンプに行き、活動した。また、キャンプでの食事やテントの設営や撤去などは、やってみても結構おもしろいもので、非常にためになったと思う。

また、去年はいくつかの賞をもらって実績もふましたし、そのおかげで部費も増えた。大文化祭も他人から見ればどうか知らないが、ほくらが見たところでは、チョウの模型などが人気があり、だいたいのところは成功だったと思った。

また今年の夏休みに行った夏季合宿では、1日しか雨が降らななかったが、だいたいのところは予定とうりふましたし、井原特産のウラボシシシシミヤ、とてもきれいなアサヤマカウというチョウなどを採集ふまこととても楽しかった。それにしても山や野鳥も、チョウをおいかけまわすのは、とても長分のよいものだし、その後の展羽というのはチョウの羽を広げるのだから、これも興味ある仕事です。

とにかく、この2年間生物部でいるんなことをふまてよかったと思います。

また今年の1年生達にもがんばってほしいと思います。

---

## 翌来年に向けて

1年8組 永瀬 洋子

5月から今まで生物部に所属している動植物についての動植物についてもっと知識を身につけたいと思う。

その手始めに、チョウの種類、名前を見分けられるようにしたい。

来年も生物部に男女ともたくさん入りますように。

1年4組 岡部敬子

生物部に入、た時、~~一瞬後悔したが~~、1歩部室に足を踏み入れた以上返と帰ることできません、現在まで至、ているのだが、入、てみるとけっ、こうおもしろかった。来年は、も、と、も、とおもしろおかしくや、てりまたいなあと思います。  
しかし、今の1年生は、アホなバカデブジョンばかりいるので、先ゆま不安を感じます。来年入、てくる1年生に少しでもまともな人が入、てくることを願っています

1年6組 増田康光

4月、"生き物ほんごい"を見て、ツニヤママネコを捜そう!と入部して、始めは少しはヤル気もあつたけれど、蝶の調査にも多少は助け気味の今日このごろ。  
\*そのわりにはシミ2頭しかとっていない!  
来年は心を入れ替えて、生物部員として、ちょっとは真面目に活動しようかな?

1年5組 阿比留誠二

何やららんがヤル気満々た、た入部当初である。補蝶にしても居翅にしても、はりま、てホイホイかんばつていた。ところが最近にな、て急におちこんでしまったのである。文化祭があるのこのごろは、毎日かんばつておられます。  
来年に向けて!といわれども、来年はきちんとした生物部があるかどうかな?...

1年2組 大木貴博

来年は研究熱心な先輩達が去って、僕達現1年生と新1年生の編成となります。  
\*入部者がいるかどうか?  
僕は先輩達がつく、てまた数々の栄光をけかすが、精一杯の努力をして行きたいと思ひます。  
\*うまき!

1年7組 渡辺野康樹

来年は、精一杯努力をして行きたいと思ひます。今まではいぼつてばかりだったので、これからまじめに行きたいと思ひます。

1年4組 松本利信

剣道部からK君に誘われて、生物部に入、て。最初のうちは僕にできるのか?と心配していたが、入、てみると以外におもしろかったの安心した。来年は今よりもっと生物のことに勉強し、みんなと同じように、何もかもやっていきたい。これからかまうビルドー!

## 1年2組 宗綱4号

来年は先輩達が去って行って、いよいよ僕達だけで生物部を構成して行くわけですが、いつも僕達はさぼったりしていろいろと迷惑をかけています。だから来年こそは、まじめにクラブに参加し、がんばりたいと思いますし、いままでの大会によって勝ち取った、栄こうを守っていきたいと思います。



### 編集後記



今年は、例年にはない天候不順な年で、私達・生物部の合宿の中日に雷雨にたたくれました。が、今年は例年ではあまり採れないような蝶も数多く採ることができました。ただアゲハのウラ科についてのまとめが本誌の発行までに間に合わなかったことが残念に思います。

なお、色々と未熟な面がありましたでしょうか御容赦ください。ごまましたら皆様への御意見・御感想をお寄せ下さいば光栄です。(歌野啓一)

対馬の自然 No. 13

印刷・発行：長崎県立対馬高校生物部  
(〒817 長崎県下県郡巖原町東里120)  
発行月日：1980年10月30日

— 対馬の自然 No. 13 —

印刷・発行：長崎県立対馬高校生物部  
(〒817 長崎県下県郡瀬原町東里120)

発行月日：1980年10月30日